



戦死者に恵方はこの世還りこよ  
良寛さん時雨つづけば人老ゆと  
歩き巫女の小さき墓や寒波来る  
神饌の葉の豊かなる聖護院大根  
若水や身ぬちに微かなる羽音  
茶の蕾ふくらみてより遊行期へ  
トルストイ目覚めよ凍土解かしめよ  
雪炎に息をととのへ北狐  
素手といふ纏はざるもの手毬つく  
さりさりと神の降り立つふくさ藁  
掛取りを手伝ひし日よ小さき日よ  
世の闇に木菟の鳴き声絡まりぬ  
月光に触れむささびの眼の真つ赤  
裸木の風に曝されたる自由

ポインセチア開戦の日が来ると母

宮岡光子

防衛費倍増とやらごまめ炒る  
ポケットは小さき部屋や青木の実  
大年の縦の木にまだ光るもの  
戦争の起きし今年の煤払ふ  
朝明けや兎跳びゆく光さし  
凧の吹きて今宵の紙芝居  
初炊ぎ釜いっぱいのめでたさよ  
冬帽や自立する子の目に力  
寒月光荒野の死者に降り注ぐ  
蜻蛉の骸休むる花終  
松過ぎの思はぬ孤独平和ぼけ  
山の講暁降ち矢を放つ  
駅舎にも鳥居のありて大試験

栗原利代子  
篠遠早紀  
市原啓子  
玉木愛子  
沖野外輝夫  
伊藤木公  
木津谷幸恵  
大崎弘子  
馬場慧子  
下川千里  
百瀬石滄子  
名取朋子  
荻上美伎子

大鍋で冬菜湯がくや給料日  
六日晴れやうやく初日初山河  
荒星や媼翁が反核デモ

宮澤朝子  
松井弓  
山崎和之

——同人集・岳集・青雲集から

巻頭のことば 俳句は個の文学ではない。敢えて数字で示すと、作り手という個性は五〇パーセント、読み手という衆の眼力が五〇パーセント。合わせて一句が成り立つ。読み手がいなければ、作り手だけでは作品にならないのである。読み手は只今だけでなく、未来の読者も想定している。後世になって注目される俳句もあるからである。ともかく、俳句は一人の文学ではない。自分以外の他者の理解・評価があつて初めて一句が成立する文学である。もっと論理的にいいたいところであるが、趣旨は同好の士の集まり、結社があつて私の俳句がある。さらに結社は沢山の支援者があつて続けて来ることが出来たのである。

創刊四十五周年は、ひとりひとり、私という個の精進・努力を讃えると同時に、支援してくださった他者への感謝の祝祭である。短詩型文学の俳句は他者の眼、支援がなければ成立しないことを改めて承知しておきたい。

戦死者にとり恵方がこの世とはぎりぎりの反戦思想である

戦死者に恵方はこの世還りこよ 矢島 恵

ロシアのウクライナ侵略戦争を止めさせることができないとはなんと不甲斐ないことか。戦死者の魂よ、戦場に浮遊することなかれ。この世に還って来い。縁起でもなんでも担ぎ

茶の蕾ふくらみてより遊行期へ 橋本 幸篤

「遊行期」とは七十五歳から死ぬまでをいう由。死を迎える支度の時期か。茶の花の蕾が膨らむ。静かな心境への憧れを句に。初めて遊行期という言葉を知り私も驚いている。

トルストイ目覚めよ凍土解かしめよ ビュニャール

『戦争と平和』の著者トルストイ。現状を見ていかん。ロシアの雁字搦めのナショナリズム、軍国主義の凍土を溶かしてくれないか。フランス在住の作者。ウクライナと同じ大陸に居住する者としての哀願の作。大いに共感したい。

雪炎に息をととのへ北狐 西牧千恵子

雪炎とは高山に積もった雪が風に飛ばされ日に輝くさま。北北海道の大雪山あたりの光景である。北狐を描き、厳しい風景に作者の祈りが籠められている。

素手といふ纏はざるもの手毬つく 篠遠 良子

今月の秀句

良寛さん時雨つづけば人老ゆと 清水 道徑

『校注良寛全歌集』（谷川敏朗）から適切な例歌を引きたかったが、長歌以外見つからない。巧みな感慨である。宗祇のように、芭蕉のように、隠者風に時雨、時雨では老ける。恋の良寛さんの飄々たる境涯がいい。同国人の道徑の共感だけに思いが深い。

たい。恵方はこの世の家族のもとにリターンすること。この世のこれほどの愚を誰も防げない。哀しい。無限に悔しい。

歩き巫女の小さき墓や寒波来る 田中 純子

北国街道筋の宿場には遊行のような「歩き巫女」がたくさんいたことが想像される。例えば信濃追分には飯盛女ばかりでなく、拜んだり、摩ったり、あるいは自身が拜まれたり、摩られたり、ともかく生きるの生半可ではなかった時代。信濃追分の吉野大夫の墓の類には心惹かれる。探求心旺盛な作者。ときに独りよがりになることもあるが、人を惹きつける魅力を持っている。この句の腰の低い地味な発掘はいい。

神饌の葉の豊かなる聖護院大根 久根美和子

産土への収穫祭の神饌であろうか。ゆさゆさの葉に太々した大根の聖護院大根。豊かな気分が掻き立てられる。

若水や身ぬちに微かなる羽音 宮島 英子

元旦に汲む井戸水であるが、本来は立春の日に汲んだ水である。「あらたまの春立つ日、これを奉れば若水とは申すにや」（公事年中）とある。太陽暦の暦の二〇二三年は立春が二月四日。旧暦の元日は一月二十二日であったので、立春は旧暦の小正月に当たる。文字通り新春である。若水を口にして鳥心地の羽音を感じたものか。爽やかな句である。

素手への注目に感心した。手毬は素手でつく。俳句は素手の文芸であることを深く考えたい。時代の衣装は今の華やきを持つが刻々古びる。忘れられてゆく。堅実な作者。

さりさと神の降り立つくさ藁 木村由里子

年神さま（歳徳神）が降臨する音が「さりさと」とは素朴である。玄関先に敷くくさ藁から足音が聞えるようだ。民話の風情があるう。

掛取りを手伝ひし日よ小さき日よ 水野 星閣

商家の歳末は猫の手も借りた忙しさだ。子供ながら掛取りという集金を手伝われたのである。昔は盆暮れ勘定であった。私も同じ経験を持つ。嫌で嫌で、それでも今に見ると自分に言い聞かせ、手伝った。「小さき日よ」がじんとくる。

世の闇に木菟の鳴き声絡まりぬ 長島 環

一句に詩情がある。暗い世情に辛うじて「木菟の鳴き声」を感じること雑駁さから救われている。

月光に触れむささびの眼の真つ赤 山口 章子

宵に滑空するむささびが持つ野生に生きる厳しさを「真つ赤な眼」から捉え、見事である。生き方が意欲的だ。

裸木の風に曝されたる自由 島田 葉月

現代の自由とはなにか。真冬の裸木が強風に曝されたきびしさとの闘いと見る。そこに時代を拓いていく意欲が滲む。雪嶺集・前山集からの推薦候補作をあげる。

手毬鳴みな笑つてゐる写真  
堤 保徳  
卒寿な少年の目や寒に入る  
古畑 恒雄  
冬木立遠まなざして歩めよと  
岩井かりん  
晩年に残る力や年の餅  
上條 忠昭

ポケットは小さな部屋―学問の門を叩く初々しい大学院生  
ポケットは小さき部屋や青木の実 篠遠 早紀

勉強をする学生時代に祝福あれ。冬の青木の実の慎ましき。質素、誠実。作者は教育学部四年間を終え、さらに専門を深めている。豊かな探求心の持主。鍵を秘めたポケット。

私は今でもしばしば学生時代の夢をみる。私事にわたるが、一九六〇（昭和三十五）年安保騒動までの波乱に満ちた昭和三十年代前半が学生時代であった。時間がなかった。今でもその穴埋めのような暮らしではないかと思う。私はついポケット

今月の秀句

ポインセチア開戦の日が来ると母 宮岡 光子

第二次大戦（太平洋戦争）の体験者である母。もう騙されないという気持の昂揚感が、現代の世相を見て「開戦の日が来る」との言葉になった。真赤なポインセチアを置いた知的感受性が鋭い。世はどんちゃん騒ぎの狂気の中で、ずるずると「防衛費倍増」の戦争準備体制が整っていく。母の勘はそこを突いている。毎月目を瞠る作品を提示する作者である。

月の寒さも吹っ飛ぶ明るさがうれしい。 大崎 弘子

冬帽や自立する子の目に力 大崎 弘子

確かな句である。ことばは平凡であるが、句の中味が胸に響く。「目に力」がいのち。自立とは多難であるが、熱い。

寒月光荒野の死者に降り注ぐ 馬場 慧子

ウクライナ戦での死者か、あるいはトルコ地震の被災者か。厳しい。この世に生まれ、どれだけ生きたものか。いのちの尊さを百回も千回も呟きたい。

蜻蛉の骸休むる花枝 下川 千里

初冬の終の花のやさしさ。棘の葉に縋り、芳香を放つ花を簪に横たわる蜻蛉の骸。ここにも蜻蛉のいのちがあった。

松過ぎの思はぬ孤独平和ほけ 百瀬石濤子

大正月が終わって、また退屈な日常に入る。ぽかんとしたのである。孤独とはこれか。シベリア抑留に堪え、九十七歳生き抜く作者。「平和ほけ」は厳しい自己反省の言葉。

山の講 暁降ち矢を放つ 名取 朋子

「暁降ち」とは夜明けに近い明け方。山の講の早朝の儀式に東の空に向かって矢を放った。冬は杣や樵の季節。山人の暮らしを大事にしたい。我々の生活の原型がある。

駅舎にも鳥居のありて大試験 荻上美伎子

駅構内に赤い鳥居が建ち、受験生が合格祈願をする。祈禱ばやりの現今、縋れるものにはなんでも縋りたい。

トに詰める癖が治らない。黄昏であるが、ポケットが懐かしい。 栗原利代子

防衛費倍増とやらごまめ炒る 栗原利代子

「ごまめ炒る」とはユーモアがある。誤魔化されないぞとの呟きを感じさせる。世相批判は余裕をもって柔軟に。そのお手本のような秀作。露骨な事柄が円やかに響くのが巧い。

大年の樅の木にまだ光るもの 市原 啓子

クリスマスツリーの名残である。時間は残酷だ。ことが過ぎると忽ち感激が褪せる。人間の思考はいつも前向き。大年は大晦日。一年の最後の日だけに残渣のようなきらきら星が気になったのである。新鮮な句をさりげなく創る作者。

戦争の起きし今年の煤払ふ 玉木 愛子

ウクライナ戦争は日本にも「戦争」であった。はじめを付けた表現にはつとめた。世界は一つになりつつある。

朝明けや兎跳びゆく光さし 沖野外輝夫

諏訪湖が結水しない。御神渡りを期待する八剣神社の氏子総代の作者にとり、兎波が沖へ跳ねてゆく明けの海は残念この上ない光景である。「朝明けや」に拍子抜けの気持が籠る。

凧の吹きて今宵の紙芝居 伊藤 木公

飛騨高山の冬。冬の夜話ではなく、紙芝居が民話の街高山の情感を感じさせる。鄙びて慎ましい。

初炊ぎ釜いっぱいのめでたさよ 木津谷幸恵

新年に家族が揃い、釜いっぱいのご飯を炊く。珍しい。「めでたさよ」と手放しの飲び。釧路在住の作者。釧路の正

青雲集

大鍋で冬菜湯がくや給料日 宮澤 朝子

ささやかな贅沢。安上りなのがいい。湯掻いた冬菜に鯉節をたっぷり振って、むしゃむしゃ。お腹いっぱい。今日は給料日。

六日晴れやうやく初日初山河 松井 弓

雪の新潟、吹雪に暮れて、元日から五日までお天道さまは御隠れ。晴れたのが六日。初日を拜み、四方の山河を見渡す。これぞ「初日初山河」。処変われば、初日、初山河も東京とは違うとは面白い。体験者でないと気が付かないことばかり。

荒星や媼翁が反核デモ 山崎 和之

世は媼翁で持っている。若者は渋谷のハチ公前でガチャガチャの流行りを奏で、爺婆はプラカードを掲げて日比谷公園から永田町へ反核デモ行進。声は上げない。さてさて。プーチンが核のボタンを押すとか押さないとか。

岳集・青雲集から推薦候補作をあげる。

ミサイルの塵芥沈む春の海 増田 義幸  
善光寺の舞ひ立つ煤払 小澤 準一  
流木に鳥のあふれる初茜 石井紀美子  
切干を山ほどお嬢々たのもしき 功刀たかね  
地下壕に残る雷管年移る 小林 茂昭  
読初めのドナルドキーン怒の深し 太田 滋  
寒波来る猫の一蔑とげとげし 瀧澤 京子  
青きもの護るがごとし冬の草 牧野真知子  
いつときで消ゆる夕映凝鮎 生野 智久